

# 聴覚特別支援学校における看図アプローチを活用した授業づくり(Ⅱ)

—F校における看図アプローチの受容と実践—

鹿内 信善

Application of the 'KANZU' approach to the construction of educational program for students at the school for deaf and hard of hearing (II)

Nobuyoshi SHIKANAI

## 概要

聴覚特別支援学校であるF校では、全校で看図アプローチに対する理解を深める全校研修会を企画してくれた。まずその研修会の内容について報告する。研修会のあと、学校長・研究担当教員との研究打ち合わせも行った。それによりF校中学部で看図アプローチを取り入れた授業実践を継続的に行っていくことになった。とくに「自立活動」の支援で看図アプローチは効果的に活用されている。また、教員の工夫も加えて教科指導においても看図アプローチが活用され始めた。これらの実践についても報告する。

キーワード：聴覚特別支援教育，言語活動の充実，看図アプローチ，看図作文

## I. 目的

筆者は現在、科学研究費を得て「聴覚障害児の言語活動を充実させる看図アプローチを用いた教材開発・授業開発」研究を行っている。この研究は聴覚特別支援学校の協力がなければ発展させることができない。前報（鹿内2018）では聴覚特別支援学校の協力を得るための活動について紹介した。看図アプローチは聴覚に障害をもった子どもたちの「言語活動の充実」に役立つものである。このことを聴覚特別支援学校教員に理解してもらうための資料を作成した。この資料を活用して、聴覚特別支援学校であるF校教員5名にプレゼンを行った。その結果、看図アプローチをテーマにした全校研修会を開催してもらえることになった。ここまでの内容と経緯は前稿で報告してある。今回新たに行った全校研修会を経て、F校中学部で看図アプローチを日常の授業に取り入れることになった。中学部の実践では、外部に発信できる成果も生まれ始めている。

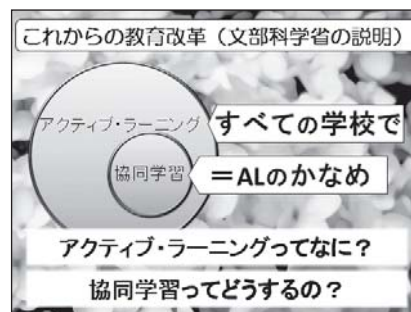
本稿では、全校研修会の概要に加え、その後の中学部での看図アプローチ実践の展開についても紹介していく。このような概観を行うことにより、今後F校で行っていく実践・研究の次の課題も把握していく。

## II. 全校研修会の概略

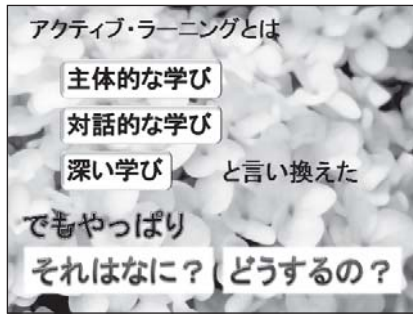
### II-1 導入部分

この全校研修会は、筆者2回目のF校訪問である。初回の看図アプローチ説明会への参加教員は、学校長を含め5名のみであった。今回は、幼稚部・小学部・中学部の、すべての学部から20名の教員が参加してくれた。

前回の訪問は2017年6月22日、今回は同年8月24日である。この2か月の間に「アクティブ・ラーニング」は「主体的・対話的な深い学び」と表現されることが多くなってきた。研修会で使用するスライドも、急激な時代の流れに対応させて手直した。今回の研修会の導入部分がスライド1～5である。



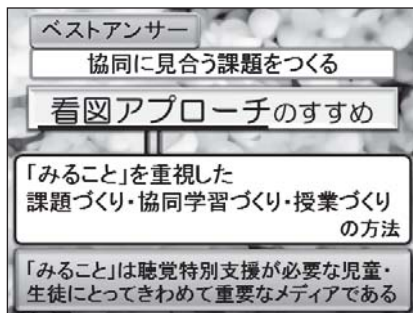
スライド1



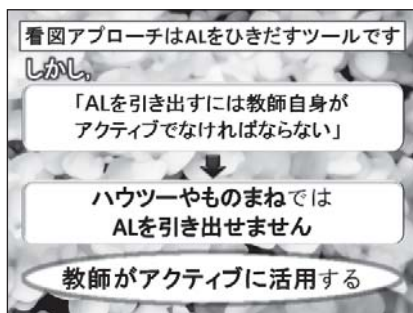
スライド2



スライド3



スライド4



スライド5

これらのスライドを呈示しながら以下の内容について確認した。

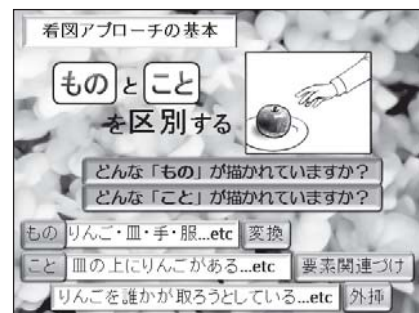
「協同学習はアクティブ・ラーニングの『かなめ』あるいは『核』となり得る。しかし、協同学習の技法だけ学んでも協同学習を成立させることはできない。協同学習を取り入れた授業を成立させるためには、協同に見合う課題が必要となる。にもかかわらず、協同に見合う課題をつくるのは難しい。このような課題をどうやってつくったらいいのだろうか。その答えを提供してくれるの

が看図アプローチである。」

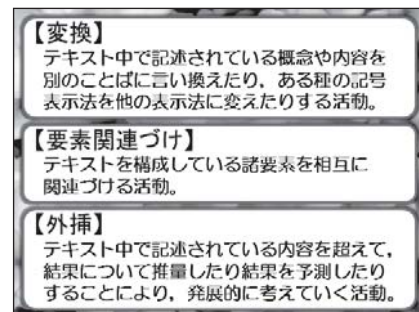
また看図アプローチは「みること」を重視した課題づくり・協同学習づくり・授業づくりの方法であることを説明した。さらに「みること」は聴覚特別支援が必要な児童にとってきわめて重要なメディアであることも強調した。「みること」が聴覚特別支援の領域で十分に活用されてこなかったことも指摘した。

## II-2 ものこと原理

看図アプローチでは、学習者にビジュアルテキストを「よくみて」もらうために「ものこと原理」を活用している。「ものこと原理」の詳細は、前稿で紹介している。今回はスライド6を用いて解説した。また、看図アプローチが仮定しているビジュアルテキストの情報処理についてもスライド7で説明した。



スライド6



スライド7

## II-3 看図アプローチで用いるビジュアルテキスト

筆者らは、聴覚に障害をもった学習者の言語活動を充実させることを目的として看図アプローチを導入している。言語活動を充実させるためには、学習者の言語活動を引き出す発問が必要になる。適切なビジュアルテキストを用意し、スライド7に示した処理モデルを活用すれば、学習者の言語活動を引き出す発問を考えることができる。適切なビジュアルテキストがあれば、スライド7に示した処理モデルは授業づくりのモデルにもなるのである。これは看図アプローチの長所のひとつである。ここで言う適切なビジュアルテキストとは、適度の曖昧や空白をもっているものである。今回の研修では図1の絵図を用いた。なお、本稿で紹介している絵図は、すべて看図アプローチ研究会専属アートスタッフ「石田ゆき」

が制作したオリジナル作品である。

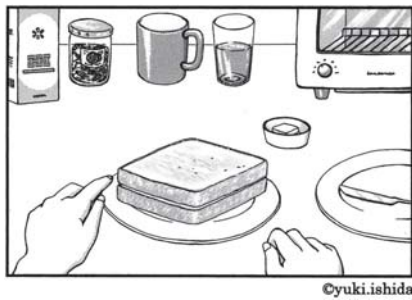


図1

#### Ⅱ-4 看図アプローチによる発問のつくり方

まず、図1のビジュアルテキストを「よくみて」もらうため「ものこと原理」にしたがった指示をする。最初の指示は「(図1には) どんな『もの』が描かれていますか。10個書き出してください。」である。図1の中に「絵図」として描かれている記号を「言語」記号に「変換」してもらい指示である。書き出した「もの」はラウンドロビンによってグループシェアしてもらう。自分が気づいていなかった「もの」を他のグループメンバーが発言したら、それを赤でメモしてもらう。以上は看図アプローチの一般的な手続きである。

このあとスライド8を用いて中心発問を3つしていく。なお、学習者の手元には図1絵図は配付されている。



スライド8

スライド8では発問が3つ出ている。しかし実際には、これらの発問は1個ずつ順番に呈示していく。Q1は「矢印がさしている紙パック中の液体をどの容器で飲むのか」という発問である。紙パックの中身は「牛乳」にも「ジュース」にも見えるように描いてある。このような「曖昧さ」をもったビジュアルテキストが看図アプローチの授業では必須である。

図1には「器」と考えられる「もの」が少なくとも2つ描かれている。パックの横にある「ビン」や「バター」(と思われるもの)が入っているカップも「器」とみなすと、器は4つになる。しかし、図1を使ってQ1の発問をすると、ほとんどのグループで『「マグカップ」か『ガラス』のどちらで飲むのか』という議論になる。Q1の発問によって紙パックとマグカップ・ガラスを関連づけ

る「要素関連づけ」処理が引き出される。また、どの器を使うかという判断は絵図に描かれていることを超えて、かつ絵図に描かれていることと整合性のある学習者の既有知識と関連づけてなされる。これが「外挿」という処理である。

Q2も同様に活発なグループディスカッションを生み出す。「バターに手がついていないからこれから焼くところ」「焦げ目がついているように見えるからもう焼いたあと」などの意見が出される。そのうちに「トースターのタイマーが0になっていない」という人が出てきて、それを判断材料にして、「これからトーストする派」と「トーストしたあと派」の議論になっていく。このような展開が多くみられる。

Q1・Q2のように「曖昧さ」を含んだビジュアルテキストとそれを活用した選択肢発問で活発な言語活動を引き出すことができる。スライド8中のQ3では明確な選択肢が呈示されていない。しかし、Q3の矢印が指示している皿の用途を考えるのは難しいことではない。また、学習者たちが考える用途は、たいいて異なる。そのため、例えば4人グループの場合は4つの用途が意見として出される。学習者たちは、それら4つの用途のうちどれが一番もっともらしい考えか討論していく。つまりQ3でも、「曖昧さ」を含んだビジュアルテキストと、それを活用した選択肢発問を行ったことと同じ状況が生まれてくる。

図1の絵図とQ1～Q3の発問には、このような工夫が施されている。以上のような教材を用いることにより研修に参加した教員たちは看図アプローチに必要な絵図や発問の条件を学ぶことができる。また看図アプローチは、討論などの言語活動を活性化することも体験的に理解できる。そのような目標を達成するための教材として図1およびスライド8を活用した。

#### Ⅱ-5 作文の授業をアクティブ・ラーニング化する看図作文

聴覚に障害をもっている児童生徒が書記日本語を習得していくための教材として、看図作文も紹介した。用いた絵図は図2である。筆者らが「ねぎ」とよんでいる絵図である。

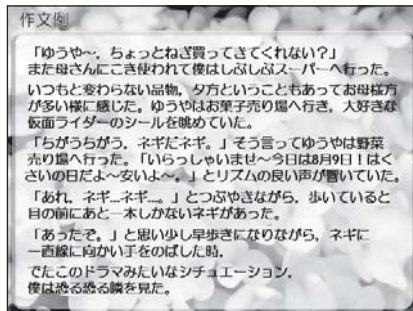


図2

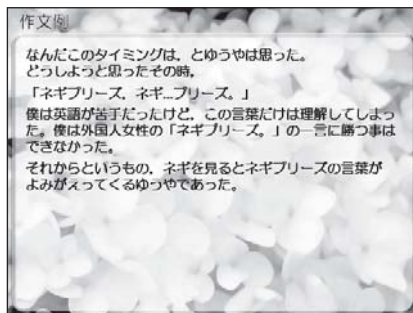
この絵図を用いた授業の仕方・教示の仕方はいくつかある（鹿内2014）。今回の研修会では「ものこと原理」を活用したシンプルな方法を紹介した。図2をテキストにして次の2つの発問をし、グループシェアやグループディスカッションをしてもらった。

「どんな『もの』が描かれていますか。10個書いてください。」「どんな『こと』が起っていますか。」

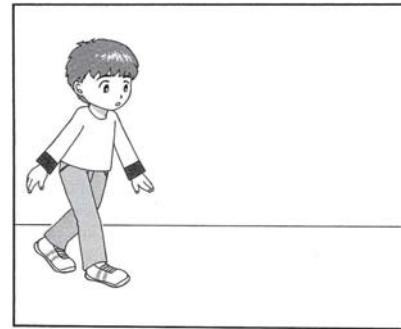
実際の作文例もスライド9と10で呈示した。これは大学生が書いてくれた作文の一例である。なお今回の研修参加者の中に手話通訳が必要な人もいる。筆者からの呈示情報がその人に伝わりやすくするため、文字情報を含むスライドを今回は多く用いている。



スライド9

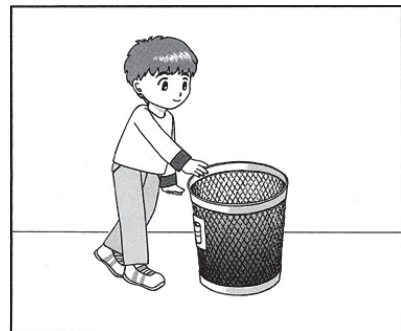


スライド10



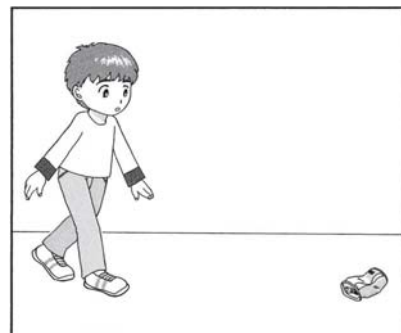
©yuki.ishida

図4



©yuki.ishida

図5

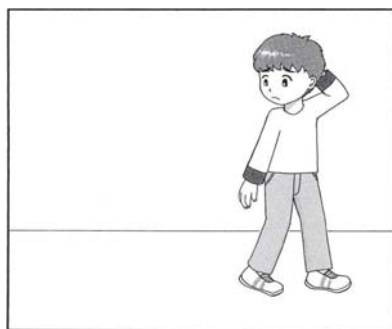


©yuki.ishida

図6

## II-6 幼児教育における言語活動の充実

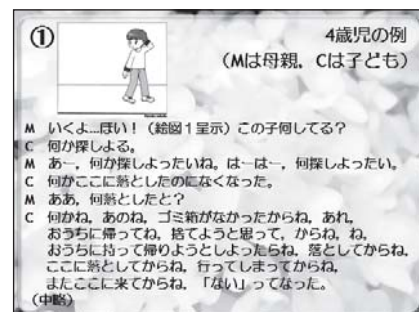
研修参加者に幼稚部の教員も含まれている。そのため幼児の言語活動を充実させる教材も紹介した。今回は図3~6を用いた。対象が幼児であるため看図作文ではなく「看図でおはなし」という口頭作文や手話作文に活用できる絵図である。



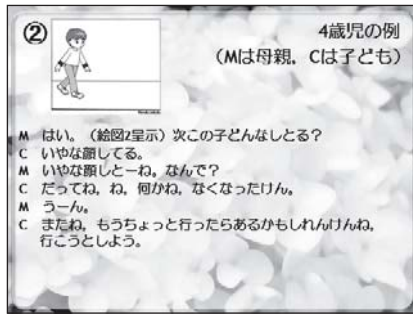
©yuki.ishida

図3

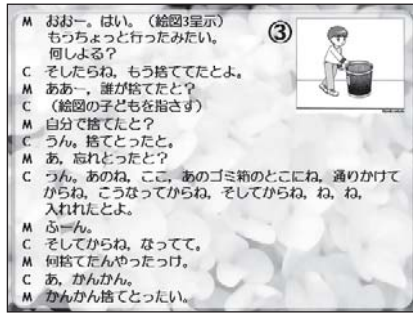
これらの絵図を用いて4歳児を対象にして行った「看図でおはなし実践」例も紹介した。音源データでの紹介も可能であるが、今回はスライド中の文字情報として呈示した。「看図でおはなし実践」例はスライド11~14である。実践者は看図アプローチ研究会の山下雅佳実、絵図制作は看図アプローチ研究会専属アートスタッフの石田ゆきである。



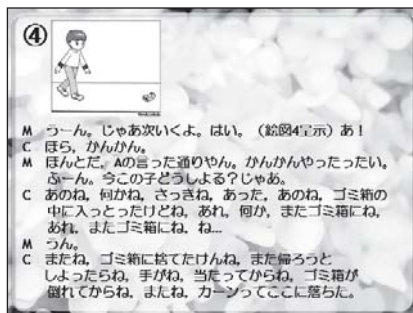
スライド11



スライド12



スライド13



スライド14

今回紹介した実践の特色を図示したのがスライド15である。



スライド15

絵図に描かれている「こと」の時系列は、スライド15の下段のように並べると無理なく理解できる。しかし、ここで紹介した実践では、スライド15の上段の順序で絵図を呈示している。自然な時系列が崩れているため、幼児はおはなしをつくる時絵図と絵図の間を埋めるための情報をたくさんつくり出さなければならない。つまり

スライド15の上段配列は下段配列よりも「曖昧さ」が高いものになっている。しかし4歳児でもスライド15の上段配列から生じる「曖昧さ」を解消していけるのである。このことがスライド11～14に示されている。

図3～6は活用できる学習者の年齢範囲が広い。ここでは手話作文用の教材として紹介したが、看図作文(書記日本語学習)の教材としても活用できる。以上のことも研修参加者に伝えた。

## Ⅱ-7 具体的な実践に向けて

実際に看図アプローチを教室で活用するためのイメージをもってもらふ必要がある。そのために、先行して看図アプローチを授業に取り入れている聴覚特別支援学校S校の事例を写真も交えて紹介した。S校の実践は、増谷他(2017)で詳述しているのでここでの再掲は省略する。

ここまで、F校で行った全校研修会の内容を理論的な説明も交えて紹介してきた。研修内容をこのように論文としてまとめておけば、F校の教員たちが、今後、独自の工夫を加えて看図アプローチ授業をつくっていく際の指針とすることができる。研修会を形だけの企画で終わらせないために本稿をまとめた。さらに、看図アプローチをF校の実践に取り入れていくための打ち合わせも行った。打ち合わせは全校研修会終了後、学校長・中学部研究主任と鹿内の3人で行った。学校長のリーダーシップも発揮してもらい、中学部で2学期から看図アプローチに取り組むという結論になった。

## Ⅲ. F校における看図アプローチ実践と今後の展開

### Ⅲ-1 中学部での実践報告

2017年11月16日にも筆者はF校を訪問した。これが3度目の訪問となる。F校中学部では看図アプローチを取り入れた授業実践がすすんでおり、筆者は「自立活動」「英語」「国語」の授業を参観した。参観したすべての授業で教師たちの独自の工夫を取り入れた看図アプローチが行われていた。なお、16日の訪問時には「英語」「国語」の授業を担当した教員との授業検討会も行った。さらに中学部教員を対象とした看図アプローチ研修会も行った。これらについては紙幅の都合により紹介を割愛する。

中学部の実践の実際については、中学部研究主任が概要をまとめてくれているので、次にそれを載せておく。

#### 中学部研究主任による実践報告

##### 「看図アプローチによる生徒の変容・教師の変化」

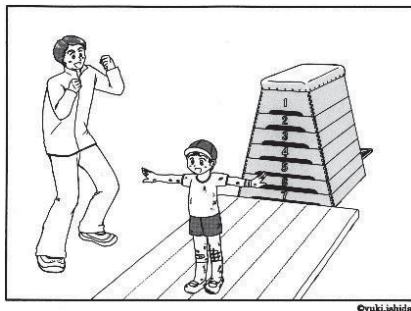
##### ◆イラストレーティングの考案

本校中学部では、学習に意欲的に取り組み、ものごとを様々な視点から考え、根拠のある意見を述べる事ができる生徒を目指している。夏休みに行った鹿

内教授のワークショップを機に、二学期から朝の活動で「看図アプローチ」を用いた自立活動「イラストレーティング」(表1)を計画し、全クラスで進めることにした。

二学期の始めに、全学年合同で「イラストレーティング」の進め方を体験する授業を行った。最初の絵を見て「もの」を取り出す活動で、生徒が次々と手を挙げて発表した。質問がシンプルで、他人が見つけない「もの」を探すというゲーム感覚からか、普段自分から発言することの少ない生徒も手を挙げていた。その後、各学級で計画に沿って進めた。

#### ◆生徒の変容



「もの」を取り出す活動では、生徒達は絵から複数の「もの」を見つけ学習プリントに書き出し、個数目標を提示すると、「服のしわ」や「糸(縫い目)」など細かな部分を見つけ出すようになった。

「こと(事実)」につなげる活動では、書くことが苦手な生徒も前時に挙げた「もの」をつなぎ合わせて文章に変えることができた。

1回目の絵を見て全員が納得できる「事実」を考える活動では、推測を加えた「意見」を述べる生徒がいた。しかし回数を重ねるうちに、「人が跳び箱を跳んだ」という友達の発表に対して、「今のは意見です。事実は『人が立っている』や『子どもが両手を水平に挙げている』です。」など生徒同士で訂正する様子が見られるようになった。

「こと(意見)」「なぜ(理由)」につなげる活動では、モニターに映っている絵を根拠に自分が想像したことを発表し合った。生徒の日記に「イラストレーティングは、自分が思い付かない見方や考え方が出てくるので楽しい。」とあった。同じ意見でも違う見方で考えていたり、同じ見方でも違う考え方があったりすることを生徒は学んでいる。

#### ◆教師の変化(さらなる発展に向けて)

職員室では「生徒が、反対意見に対して、掲示された絵や自分の経験をもとに他者を説得するようになった。」など生徒の成長を教師間でよく話している。学部全体で「看図アプローチ」という同じ手だてや視点をもって取り組んできたからこそ、生徒の変容に気付くことができ、実践の手応えを感じることができた

のだと思う。

また、「看図アプローチ」の手法を自立活動だけではなく各教科の学習に取り入れようと工夫している。専門外の教科の授業の進め方について、相談や意見をすることは少なかったが絵や図、視覚的教材をどのように使うかということも、教師間で話題に上るようになった。今後、「看図アプローチ」を幼児段階から用いることで系統的な指導が確立すると考えている。学校全体で、主体的な学習活動を通して、様々な視点をも身に付け、根拠のある意見が言える幼児・児童・生徒を育てていきたいと思う。

表1 看図アプローチを取り入れた「自立活動」の授業構成

名称	自立活動「イラストレーティング」	
期間	2017年9月～	
教材・教具	学習プリント、テレビモニター	
分担	主指導1名 板書1名	
1週間の流れ	火曜 20分	<b>絵から「もの」を取り出す</b> 1. モニターに提示された絵を見て、「もの」を学習プリントに10分で書き出す。 2. 一人1つずつ「もの」を順番に発表。(全員) 3. その都度質問・意見 4. 板書された友達の意見を学習プリントに書き写す。
	水曜 20分	<b>「もの」から「こと(事実)」につなげる</b> 1. 「こと(事実)」を学習プリントに10分で書く。 2. モニター(絵)の前で順番に発表。 3・4. 同様
	木曜 20分	<b>「もの」から「こと(意見)」「なぜ(理由)」につなげる</b> 1. 「こと(意見)」「なぜ(理由)」を学習プリントに10分で書く。 2・3・4. 同様
	週末	<b>「こと(事実・意見)」「なぜ(理由)」をもとに作文</b>

学習プリント記入例

年 組 氏名	
 <small>Cyukishida</small>	
<b>もの</b>	
かみ、ロボット、ねじ、うわぐつ、耳、手、Tシャツ、ずばん、セーター、ブーツ(手足)、まゆ毛、鼻、口、目	
<b>こと(事実)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもはふるえている。</li> <li>・子どもとロボットは向かい合っている。</li> <li>・子どもは立っている。</li> <li>・子どもはみけんにしわを寄せている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男の子がうつむいている。</li> <li>・男の子のカッターシャツが出ている。</li> </ul>
<b>こと(意見)</b>	
①子どもは泣いている。	→体をふるわせて、悲しそうな顔をしているから。
②ロボットは新しいと思う。	→キズがありませんから。
→キズがありませんから。	
③ロボットは白いと思う。	→実際に白いから。
④粘土でつくられている。(どちらとも)	→かみの毛(男の子)の線がないから。
⑤やさしいロボットは「大丈夫」と言っている。	→男の子がふるえているから。
⑥男の子がカッターシャツをしまい忘れた。	→すそが出ているから。
⑦ロボットは男の子を見ている。	→周りに何もいないから。

注：「もの」「こと(事実)」「こと(意見)」「なぜ」を記入し、話し合いを行う。「もの」「こと(事実)」の点線より右側は友達の見解を記録する。



写真1 主指導と板書担当に分かれてイラストトレーニングを進めている様子



写真2 画面の絵を指さして理由を述べようとしている生徒の様子

Ⅲ-2 F校から見た看図アプローチの意義と可能性

研究主任による上掲報告書からもわかるように、F校 中学部での看図アプローチを取り入れた実践は軌道に乗り始めている。今後の発展方向をさらに明確にするため、学校長に看図アプローチの意義と可能性についてまとめてもらった。

学校長から見た看図アプローチの意義と可能性

本校教育に看図アプローチを取り入れる意義と可能性

本校は、聴覚障がいの子どもが通う学校である。校訓「よく見、よく聴き、よく話し、よく考えて、行動しよう」にある姿を実現するために、幼稚園・小学校・中学校に準ずる教育を行うとともに、自立活動の指導に重点を置いて教育を行っている。自立活動の中心課題は「きこえとことば」であり、最終的にめざすところは「書記日本語の獲得」(日本語の読み書きができる)である。そのために、幼稚園の頃より絵日記指導を毎日行い、小学部以降も日記を書くことを宿題で取り組ませている。しかし子ども達は、作文を苦手としている。書きたいことが見つからなかったり、思いを表す適切な言葉が浮かばなかったり、したことを時系列で並べ最後に感想を書くワンパターンの文になつたりしている現状がある。

学習指導を行うに当たっては、「通じる」、「分かる」、「考える」授業が求められる。本校も大量退職・大量採用の影響で、教職経験、聴覚障がい教育経験の浅い教員が大半を占めている。まずは子ども達と通じるために、「手話」を学んでいるが、その先の「分かる」「考える」授業は簡単に進まず、教員主導になりがちである。本年度「思考力の育成」をテーマに、校内研究に取り組んでいる。年度当初、各学部とも「思考とは何か」について考え、特に中学部は「思考を促す手立て」に悩んでいた。そんな時に「看図アプローチ」に出会い、次の点で本校の今後の授業改善に役立つと考え、中学部で2学期から取り組ませることにした。

一つは「見る」ということ。校訓の筆頭にあるように子ども達の最大の長所であり、情報収集の手段である「見る」が基本であること。これまで授業では視覚的教材を毎日準備しているが、見せることに終わり、何を、何のために、どのように見せ、どう広げるかまでつながっていない。看図アプローチの手法で「よく見て考えさせる」授業づくりを学んでいくことができる。と考える。

二つは「看図作文」であること。子ども達が絵を見ることで、想像を広げ、楽しんで作文を書く活動が期待できる。特に本校の子どもは語彙が少ないことも課題である。「もの」を見つけ出し合うことで、多くの言葉に触れ、それを頼りに作文していくことができる。また、準備されている「図」も子ども達の実態に

応じて使うことができるのも魅力である。

三つは「主体的で対話的な深い学びが期待できる」こと。これまでの授業では、教員の発問やその教科の得意な生徒の発言が中心となって進む傾向があるが、看図アプローチでは、教科の得意不得意は関係なく、全員が自由に発言することができる。また、見たこと（事実）を根拠に自分の意見や考えをもち、述べ合う経験は、各教科の学習でのものの見方考え方に生かされると考える。

他にも、まだまだ期待するところは大きいですが、まずは中学部の実践を踏まえ、今後、他の学部にも広がっていくことを期待している。

「中学部の実践を踏まえ、今後、他の学部にも広がっていくことを期待している。」学校長が明示しているこの方向性を実現するための支援を今後も行っていく。そのために2018年2月9日に4度目の訪問をし、授業参観・研修会等を行うことになっている。4月以降も継続していく。中学部ではすでにF校独自の実践がなされている。

これをベースにして持続的かつ全校的な取り組みを行い、F校独自の実践成果を全国に発信していきたい。

注1：本研究は科学研究費16K04728「聴覚障害児の言語活動を充実させる看図アプローチを用いた教材開発・授業開発」（研究代表者鹿内信善）の助成を受けた。

注2：本研究は福岡女学院大学研究倫理審査委員会の承認を得ている。

## 文 献

増谷梓他 2017 聾学校小学部での看図作文の実践：日本手話を活用した日本語指導『福岡女学院大学紀要人間関係学部編』第18号 pp.99-109

鹿内信善 2014 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち●看図作文レポート●』ナカニシヤ出版

鹿内信善 2018 聴覚特別支援学校における看図アプローチを活用した授業づくり（I）—F校に対する看図アプローチの紹介活動—『福岡女学院大学大学院紀要発達教育学』第5号（印刷中）